

Sensibilityの行方—*Sense and Sensibility*から*Persuasion*へ

田中淑子

The Direction of Sensibility from *Sense and Sensibility* to *Persuasion*

Yoshiko TANAKA

Abbreviations

SS *Sense and Sensibility*

P *Persuasion*

Abstract

It was in the middle of the 18th century that “sentiment” and “sensibility” became the key words of the age. The interest in “feeling” was a powerful reaction against Classicism which dominated the first half of the 18th century with emphasis on “reason.” Sentimental novels were in full bloom, involving the female writers and readers and accelerating the popularity with a great help of circular libraries. Yet it is very difficult to define “sensibility” as *The Universal Magazine* (1778) called it “the enigmatic moral feeling” which was a moral view based on the unreliable feeling. Which should come first, “morality” or “feeling,” “sense” or “sensibility”? This question caused perpetual controversy within the novels in those days. Jane Austen (1775–1817) underwent the flourish of sentimental novels when she was a girl and she began her career as a writer to see clearly the relation between “moral feeling” and society.

Jane Austen dealt with “sensibility in 1790s” in her work SS (written from 1796, published 1811) examining it through the failure of Marianne Dashwood’s first love with John Willoughby. Austen tried to control Marianne’s delightful sensibility by Elinor’s prudent persuasion and Brandon’s patriarchy. Our expectation that Marianne would grow through the conflict between sense and sensibility fails when we see that she married Colonel Brandon before she loved him. Austen failed to bring her heroine into a higher level of recognition. Here is “something punitive” as Tony Tanner indicates.

At the end of the 18th century, the English society dramatically began to guard against “sensibility” which had been a new social bond of the middle classes, because sensibility proved that it could be a radical feeling in the French Revolution. Yet the female writers were cornered because sensibility was considered as the women’s own peculiar quality. How to deal with it in their writings? This perplexity couldn’t help but suppress Marianne’s spontaneous response within herself.

Austen was to pay off a great debt on Marianne in *P* (1818). In *P*, the first love of the heroine is realized. Condemned sensibility in *SS* is admitted as a creative one for 27-year-old Anne Elliot. *P* is the work to rethink *SS*. The new age's advent made Austen predict that her novels had to overcome the 18th century proposition, the discord between sense and sensibility. The heroine in *P* chooses a man without estate, which is quite new in Austen's works. What does it mean to cut her from the social bond with the community? A new proposal of "elasticity of mind" is another way to ride out the storm of life in the 19th century. What could be seen through two works cleverly arranged to reflect Austen's trace of sensibility?

キーワード：Jane Austen

Sensibility と小説の関係

人々の間に情緒や感性への関心が高まり、“sentiment”や“sensibility”という言葉が時代のキーワードとなったのは、18世紀の中頃であった。18世紀前半は啓蒙の時代であり、理性を重んじる古典主義が隆盛をきわめたが、次第にその反動として、強力な国家体制より、個人に価値観の主軸は置かれるようになっていく。人間の友愛の精神や、善を強調する the Earl of Shaftesbury or Anthony Ashley Cooper の考えは、Francis Hutcheson, Adam Smith, David Hume などに受け継がれ、他者への共感や慈善を奨励する道徳の規範となった。

この新しい価値観としての“sentiment”と“sensibility”であるが、まず言葉の意味を明確にしておく必要がある。“sentiment”とは、感情・情緒のほかに道徳的見解、意見、博愛、慈善を指し、一方“sensibility”は洗練された鋭敏な感性で、研ぎ澄まされた身体的感覚、特に「苦悩に敏感な反応」をその特徴とした。“Sentimental”は両者の形容詞で、今日より肯定的な意味合いで使われた。

このような“sentiment”や sensibility を 1778 年の *The Universal Magazine* は “the enigmatic moral feeling” と呼び、「定義が難しい」と言っている。不確かな感情に基盤を置く「道徳感覚」は、それまでの理性主義と真っ向から対立するものであったろう。ところが、この感性の自由と喜び、そして教訓的道徳を兼ね備える「道徳感覚」は、興隆しつつあった中産階級の好みとも合って、彼らの “New Morality” となっていく。Cris Jones や Markman Ellis は、“sentiment” や sensibility が、貴族階級に対抗する中産階級の進歩的かつ道徳的心情となり、やがて文学に止まらず、哲学、風景の鑑賞法といった美意識、社交、生活全般にまで影響していき、

中産階級の“a new social bond”となっていく過程を丹念に分析している。

こうして、18世紀の価値観の変動に合わせてるようにして、他者の不幸に同情し、抑えることのできない感情の高ぶりを、涙や高潮した頬、動悸、失神などで表すヒーロー・ヒロインが小説に登場し始める。情緒や感性を重視する小説は、“sentimental novels”と呼ばれ、小説は多くの雑誌に掲載され、またその紙面を使って小説を巡って読者が熱い議論を戦わせた。

“Sentimental novels”の流行の原因を、Henry Mackenzieは主催する雑誌*The Lounger*, No. XX (1785)の“On Novel Writing”中で、「小説を書くのには知識も学識もさほど必要ではなく、熱い想像力さえあれば書けると思われている。……それは小説は楽に読めるからだ」と、小説のジャンルとしての地位の低さが流行の原因であると、いささか自嘲気味に述べている。彼は続けて、特に“sentimental novels”では「感情が細やかに描かれ、言葉もそれに乗って勢いがあるので、そのために真理と分別は二の次になる」と、その危険性を警告している。

しかし小説への警戒を引き起こすことになる問題は、そもそも“sentiment”や“sensibility”自体の性質によってもたらされたといえる。その“enigmatic”な特質—不確かな感情と教訓的要素の二面性という矛盾が、小説の内部で絶えず問題となったのである。半世紀も経たぬ18世紀後半には、“sentiment”や“sensibility”は新たに女性の作家・読者を巻き込み、ジャーナリズムと巡回文庫の発展を受けて、更に猛威を振るった。だが“sentimental novels”がその矛盾を保持したまま、豊かだが浅い土壌で花を咲かせたのだということを見逃してはならない。Jane Austenは少女時代に“sentimental novels”の洗礼を受けた後、この矛盾を暴露し、パロディ化することで小説家となった。しかし彼女もまた、“sentiment”や“sensibility”に囚われた作家であった。次第に彼女は、道徳感情と社会の関係そのものを見据えるざるを得なくなっていくのである。

***Sense and Sensibility* (1811)**

(1796年に*Elinor and Marianne*の題名で執筆、1797–1811年の間に書き換え、題名がSSになった。)

Jane Austenが執筆活動を行った1790年代には、既に“sensibility”の置かれる状況は厳しいものだったと考えられる。1798年8月の政府発行の雑誌*Anti-Jacobin Review and Magazine, or Monthly Political and Literary Censor* (No. 1)には、風刺画家James Gillrayの“New Morality” (図1)が掲載されている。そこには“Three Graces”として2人の女神「慈善」(Philanthro-

phy)と「正義」(Justice)に並んで「感性」(Sensibility)がいるが、“Sensibility”は、革命帽と三色のバラの花飾りを頭につけた憂い顔の若い女神で、右手に死んだ小鳥を、左手にルソーの本をもち、右足でフランス革命(1789-1799)で処刑されたルイ16世の首を押さえている。“Sensibility”は慈しみを内包し自然に感応する快い感覚であるが、Gillrayの版画では悲しみを喚起するネガティブな感覚であることが、死んだ小鳥によって強調されている。自己を解放する進歩的な感覚は、フランス革命を連想させるラディカルなものとして捉えられている。人を優しい気持ちにさせておいて、同時に人を扇情し悲嘆の底に突き落とす、道徳的には墮落しやすく、政治的にはラディカルと結びつきかねない。女神の姿には、フランス革命の反動によって保守化したイギリスが捉える「感性」の姿がある。煩わしいことに、“sensibility”は同時に

女性固有の感覚と考えられていたから、それをどう扱うかは、“sentimental novels” 流行の追い風に乗って登場した女性作家たちにとって当然、大きな問題となったのである。

Jane Austen は、SSの中で、“sensibility”の失墜を描いている。彼女は“sensibility”の有様を、John Willoughbyと Marianne Dashwoodの恋の中で検証した。Willoughbyは、洒落た服を着て、楽しいことが大好き、情熱的でハンサムな青年である。彼は“a man of feeling”を気取っているのだが、実際は借金だらけの放蕩者で、女性の心に恋を仕掛けるのも速いが、逃げだすのも速い。彼の恋は『ジョンソン辞典』が載せる“sensibility”の特質の一つ、“quickness of sensation”を具象化しているのだ。彼はMarianneに嵐のような恋愛感情を呼び覚ました。激しい喜びと同時に彼女は「道徳的墮落」の危険を味わうこととなる。自分の「感性の正しさ」を信じ恋に落ち、婚約もせずに自分の愛情を惜しみなく示したMarianneは、Willoughbyに裏切られた後、自信に満ちた自己も社会の好意も失う。彼女が悲しみから肉体まで傷めていく過程は、“sensibility”のネガティブな側面を示している。

Austenは、繊細で危うい女性の“sensibility”の失墜を救うために、“sense”を心の鎧として導入する。分別ある姉Elinorを配し、人生経験豊かなColonel BrandonをMarianneの夫とすることで、“sensibility”を分別ある説得で統御し、さらに家父長制の枠内に抑え込もうとした。もっとも姉妹で相反する性格をもち、慎重で思慮深い姉が情熱的だが現実の見えない妹を守る、この構図は“sentimental novels”が好んだ構想ではある。だがAustenはこのような“sentimental novels”の道具立て、筋立てを使いながら、巧みなパロディ化を通して、新しい真実を見せようとする。現実を目を瞑るヒロインが幸せになるのではなく、正しい現実認識に辿り着いたヒロインが、幸せになるべきなのだ。

しかしながら、パロディ化がすっきり行かない場面が二つある。一つは、いつも己を律し理性的なElinorが、後悔して謝罪に訪れたWilloughbyに対して、「分別」を代表する彼女らしくなく同情する45章の場面である。

Willoughby, he, whom only half an hour ago she had abhorred as the most worthless of men, Willoughby, in spite of all his faults, excited a degree of commiseration for the sufferings produced by them, which made her think of him as now separated for ever from her family with a tenderness, a regret, rather in proportion, as she soon acknowledged within herself— to his wishes than to his merits. She felt that his influence over her mind was heightened by circumstances which ought not in reason to have weight;—by that person of uncommon attraction, that open, affectionate, and lively manner which it was not merit to possess;

and by that still ardent love for Marianne, which it was not even innocent to indulge. But she felt that it was so, long, long before she could feel his influence less.

(SS, Ch. 45, p. 283)

上の引用に見られるように、Elinorは、Willoughbyの危険な感性を許せないとしながら、その魅力にも捉えられ、彼が帰った後しばしその影響から抜け出せず、茫然自失している。分別と感性の間で揺れ動くElinorは魅力的に映る。しかし彼女の分別ある女性という役割が、彼女の心を震撼させた分別と感性の葛藤を押え込み、妹への説得や自分の人生の選択に影響を与えない。分別と感性の間に起きる葛藤の振り子の幅が狭いことが、不満として残るのだ。他の一つは、病気を通して自己反省したMarianneが、35歳のリユーマチ持ちのColonel Brandonとの結婚を決意する50章の場面である。

Marianne Dashwood was born to an extraordinary fate. She was born to discover the falsehood of her own opinions, and to counteract, by her conduct, her most favourite maxims. She was born to overcome an affection formed so late in life as at seventeen, and with no sentiment superior to strong esteem and lively friendship, voluntarily to give her hand to another!—and that other, a man who had suffered no less than herself under the event of a former attachment, whom two years before, she had considered too old to be married,—and who still sought the constitutional safe-guard of a flannel waistcoat!

(SS, Ch. 50, p. 321)

感情と分別の葛藤を通して成長するものと期待されたMarianneは、好きになる前に大佐と結婚してしまう。これが、真の幸せだろうか。Tony Tannerが指摘するように、このようなMarianneの矮小化には、「処罰」(something punitive, p. 100)すら感じる。Austenは「彼女はそういう並外れた運命だった、……年を取り過ぎていて結婚するなんて思いもしなかった男の求婚を受け入れた」と、Marianneの予想を裏切る結果の面白さに焦点を合わせて、片付けてしまう。Mudrickが指摘するように、本来Austenの作品にはそのダイナミズムを生み出す仕掛けがある。ヒロインが失敗と覚醒の間を揺れ動く「いつもの振り子」(her regular pendulum, p. 232)が、ヒロインを更に高い現実認識のレベルへと導いていく。が、これら二つの場面では“sense”と“sensibility”の間を往復する振り子がうまく機能せず、「作者の芸術家魂の深淵にある、作者自身にも認められないもの」を“sentimental novels”の枠組みの中に入ったで、無理やり解消しようとした節がある。振り子の振幅を歪めるものは、Elinorや

Marianneの、あるいはAusten自身の、成就できないままに閉じ込められた内面の願望や情熱ではないだろうか。

保守化した社会からの圧力が、本来進歩的でかつ人を慈しむ、外に向かって開かれた感覚を抑圧する。そしてヒロインは、社会の圧力を無視しては生きられない。それが作品の構造・主題を根底から揺さぶる“dilemma”となって現れてくる。Robert Garisは、「AustenはPにおいてMarianneに与えた多大な借金を支払うことになる」という興味ある発言をしている。Pにおいては、Marianneが望んだが、成就しなかった“first attachment”が叶えられ、sensibilityは創造的な力だと認められる。主人公は美しさと活力を取り戻し、元気な若い夫が与えられるという結末となる。Garisは、「PはSSを再考することに他ならない作品だ」(p. 80)と述べているが、この合わせ鏡から何が見えてくるだろうか。

Persuasion, 1818

Pは、1814年の夏から1815年を舞台背景とする。これはPにとって必然的な設定といえる。1814年、海軍のCaptain Wentworthが帰国することから、物語は始められる。実際この年は、ウェリントン率いるイギリスが、ポルトガル・スペインとの連合により、ナポレオン軍をイベリア半島から駆逐した年である。イギリスは、1805年以来の対ナポレオン戦争に、勝利という終止符を打ったのだ。こうした時代を背景として、海軍の功績に社会が熱狂し、彼らが新興勢力としても認知された年に、AustenはCaptain Wentworthを帰国させている。

AustenはSSにおいて、John WilloughbyとMarianne Dashwoodの若々しい恋を軸にsensibilityの危険と失墜を描いたが、Pで軸となるのは過ぎ去った青春の後に再会する男女、Captain WentworthとAnne Elliotである。Pの主人公Anneは、8年前の19歳の時にWentworthと恋に落ちるが、Lady Russellの説得を受けて諦め、以後生彩を欠いた孤独な日々を過ごす27歳の女性として描かれる。即ち作品は、「女が27歳になれば、恋をしたりされたり、することもありえないのだから、実家が快適ではなく財産がなければ、看護婦の役割に甘んじてもいいと思う」(SS, Ch. 8, p. 33)というMarianneの台詞の再考から始まることになる。

Anneの姿を一層パセティックにしているのは、14歳で母を失ってから母親代わりであったLady Russellの属するジェントリイ階級の「分別」が、もはや権威たりえないことを本人が知っている点にある。作品の冒頭に紹介される父Sir Walter Elliotと姉Elizabethは、彼らの支配するKellynch-hallに充満する精神的不毛を明らかにしている。準男爵を頂くKellynch-hallの主人、Sir Walter Elliotは、風格ある自己の姿を化粧室に置いたいくつもの鏡に写し、準男爵

録を広げ読むことから一日を始める。29歳の姉の Elizabeth も、美貌と家柄へのプライドだけで、色恋沙汰のない単調で無意味な生活を支えている。彼らは衰退を予感させる美貌と爵位に延々と執着しており、準男爵録に記せるような縁談が期待できない、器量の落ちた Anne には、全く無関心である。旧社会の価値観に凝り固まった彼らだが、実は地方にまで押し寄せてきた消費文化に容易に足を掬われ、破産寸前の状態で館を人に貸すことを渋々承諾する。

Anne は、かつて華やかだった周囲の世界、そして彼女自身が空洞化していく喪失感を、苦痛をもって感じ取っている。苦しみを忘れるために Anne は、一層 “a sense of duty” をもって人の役に立とうとしているが、この理性と慎重さという分別の鎧を着せられ、若さと喜びの輝きを失った Anne の姿は、まさに 1790 年代以降の精気と革新性を失った “sensibility” の姿そのものである。ここで、SS において “sense” と “sensibility” の共存を模索した Austen は、説得に敗北した女性 Anne を登場させることで、かつての結論に「否」を唱えているようにみえる。

Anne の “sensibility” の回復はなるのか。彼女の感性は “quickness” を既に喪失しているが、8年ぶりの Wentworth との再会は、ゆっくりと彼女の感性に鼓動を与え始める。しかし、「悲惨なほど変わり、その人だと分からなかった」(Ch. 7, p. 86) という彼の冷たい発言に深い屈辱を感じた彼女は、「このようなことには無感覚 (insensible) でいられるよう戒めなければならぬ」(Ch. 6, p. 77) という理性の声に懸命に従おうとする。その精神の闘いは、彼女の分別の努力が、すぐに彼女の身体的反応によって裏切られる形で描写されていく。彼女は感情をストイックともいえる分別で抑えようとするが、Wentworth に出会うと頬が赤く染まり、目に涙が浮かび、震えずにいられないのだ。静かな Anne の内面の動揺はまさに “sensibility” の特色である鋭敏な身体的反応によって見事に描写され、読者は彼女の感性の解放を待ち望まずにはいられない。

だが Austen は、Anne に厳しい態度で臨んでいる。ハッピーエンドを用意する前に、慎重に「Anne が説得に負けた」意味を検証する必要があるのだ。その意味を Wentworth が学ばない限り、彼女の感情の不毛は回復されないからである。ここで、Marianne の再来のように、躍動感溢れる若い娘 Louisa が、Anne のライバルとして登場する。Louisa は、「すこぶる元気がよく」(Ch. 9, p. 98)、「容易に説得させられない」(Ch. 10, p. 109)、Anne とは正反対の若い女性である。Louisa は大佐が止めるのも聞かずに Cobb から飛び降り、頭を打って気絶してしまう。この場面で、Louisa の「不注意からくる向こう見ず」(the darings of heedlessness, Ch. 23, p. 244) は、冷静に事故に対処した Anne の「決然たる意志」(the resolution of a collected mind, 同上) と対比され、作者は再び後者の勝利を謳っているかにみえる。Anne の自制心に根ざした不屈の精神は Wentworth によって高く評価され、Louisa の若いラディカルな感性は

罰を加えられたかのようなからだ。しかし、一見“sense”に閉じ込められたAnneと、“sensitivity”を体現するLouisaの、お馴染みの対立構造が取られるようでありながら、Austenはここから大きく飛躍する。

そもそも、と我々はAustenと共に現実を見詰め直す。Louisaの転落事故は、Claudia L. Johnsonの指摘(p. 297)にもあるように、「幸福になりたいと思う人は、決断力がないといけませんね。……人生の実り秋にも、美しく幸福でありたければ、あなたの現在の強靱な精神を大切にすることですよ」という大佐の発言に説得された結果であった。

“Every body may sway it; let those who would be happy be firm.—Here is a nut,” said he, catching one down from an upper bough. “To exemplify,—a beautiful glossy nut, which blessed with original strength, has outlived all the storms of autumn. Not a puncture, not weak spot any where.—This nut,” he continued, with playful solemnity,—“while so many of its brethren have fallen and been trodden under foot, is still in possession of all the happiness that a hazel-nut can be supposed capable of.” Then, returning to his former earnest tone: “My first wish for all, whom I am interested in, is that they should be firm. If Louisa Musgrove would be beautiful and happy in her November of life, she will cherish all her present powers of mind.” (Ch.10, p.110)

Louisaのように好きな男性の意向に沿うためであっても、Anneの場合のように「人生において大事を取る」(Ch. 23, p. 246)ためであっても、社会的弱者である女性には、男性あるいは社会から「説得」という形をとった要求が来る。それによって彼女たちは、人生に痛手を負っているのである。

AnneがCaptain Hervilleに、次のように語る場面がある。「男性が、社会も文学も教育も独り占めにしている。」そればかりか、彼らは「その偏見に基づいて、狭い範囲に起こった都合のいい事情を組み立てる」(Ch. 23, pp. 237–8)と。ここでは、男性の自己中心性が告発されているが、Austenの洞察はやがて、易々と説得されてしまう女性自身にまで突き当たることとなる。“persuadability”の問題は、社会制度の中で不自然さを強いられる女性の自我の問題なのだ。若干19歳のAnneの感情が、どこまで社会や親の分別の要求に沿えるのか、あるいは結婚せずに経済的に自立することの不可能であった女性の情熱が、どこまで男性の説得に従うのか。女性の精神の自由はどこにあるのか。この微妙な問題を、Austenは27歳のAnneと19歳のLouisaを重ね合わせながら問うている。Wentworthも、その質問に答えねばならない。

「自分は Louisa を本当に愛していたのか、」彼の「強靱な精神」の強調に Anne への怒りはなかったのか、その背後に「Anne が自分を悪用した」という財産もなく自信もなかった若い自分への説得はなかったのだろうか。「何が Anne に愛を諦めさせたのか。」彼はそれを確かめる過程で、8年前に封印した感性を解放するのである。

無論この作品はそれほど単純ではなく、説得を巡って様々な対立構造が散りばめられている。Anne を軸に Sir Walter Elliot と William Elliot が対立し、また Lady Russell と Wentworth が対立する。その時折の Anne の態度を保守的と解釈するか、あるいは急進的な反応と取るかによって、この作品の評価は分かれてきた。しかし、“sense” と “sensitivity” の葛藤、旧体制のジェントリイ階級と新興階級の海軍士官の抗争といった図式を俯瞰すると、Austen は社会が小説に対して行ってきた「説得」を、振り切ろうとしているかのように見える。“sentimental novels” から引き継いだ “sense” と “sensitivity” による作品の二極化、それによる作品の荒廃を避けようとして、新たな工夫を模索しているように思われるのである。

Anne は、Kellynch-hall を捨て、海軍大佐を選ぶ。従来の Austen のヒロインたちがペンバリー、マンスフィールド・パーク、ハートフィールドなど地主階級を中心としたコミュニティの中で結婚し、その結婚によって社会との連携が強調されたのに対して、Anne の “a sailor’s wife” になる選択は、きわめて自由で個人的である。

当時の *The Times* (図2) に載せられた Ship News を読むと、Anne の決断の意味を知ることができる。記事から、ナポレオンの脅威 (図3) に対して、海軍の躍進・活躍がいかにか頼もしく見えたかは、容易に理解できる。しかし一方、彼らが決して紳士的とはいえないことも示唆されている。「海軍とはどこの馬の骨だか知らない者が出世する手段」(Ch. 3, p. 149) であるという Sir Walter Elliot の意見は、ほぼ事実であろう。実際 Wentworth が、25000 ポンドの財産を築きあげたのは、敵国の商船や軍艦を拿捕し奪略するという手荒い方法によるものであった。Admiral Croft の「次の戦争まで運が良ければ生き残れよ」という励ましは、この職業に付きまとう危険性と賭博性を示唆している。しかし、連日新聞の記事の人気をさらうように、彼らには運を天に任せて稼ぐエネルギッシュな勢いがある。この勢いこそが、Anne を閉塞状態から救出する上で、必要なのだ。しかもこの選択は、Anne が感情の不毛を招く「女性への説得」からも解放されうる可能性を秘めている。Anne が出会う Mrs. Croft は、提督である夫と共に5回も軍艦に乗り、大西洋を4度往復している。彼女は風雨に曝されて赤ら顔ではあるが率直で逞しい。このように海軍は、実力で食い扶持を稼ぐ率直さのままに、女性の協力を歓迎しており、Mrs. Croft はそこに家庭の幸福と自己の充実とを見出しているのである。

確かに、日焼けした顔の Anne は想像しにくい。Austen が兄との関連から海軍員であるこ

とを差し引いても、Anneの結婚は危険や賭けの要素が上回っている。だが、船出することによって、Anneは“sentimental novels”のヒロインが背負ってきた重荷からも、ようやく解き放たれるのではないだろうか。Anneにとっては、父の館も、妹が嫁いだMusgrove家での看護婦としての役割も、Kellynch-hallの相続人William Elliotとの結婚によって手に入るだろうLady Elliotの地位も、自分のidentityを確保するものではない。Anneは、世間が小説のヒロインに要求する説得を拒否する。それでは、彼女のラディカルな感性も分別ある自己抑制も、出口を見つけることができないからだ。だからこそAustenは、出口を失った“sense”と“sensitivity”の煮詰まった確執に、広大な海とそこを縦横無尽に活躍する海軍という中和剤を、Margaret Kirkhamの言葉を借りれば、「毒消し」(p. 151)として与えたのではないだろうか。

Austenが新しい時代の胎動を鋭敏に感じ取っていたもう一つの例が、Anneの結果主義とMrs. Smithの登場である。作品の結末には、AnneがLady Russellの説得に従ったことを弁明する場面がある。Anneは、「レディ・ラッセルの忠告が間違えていなかったと言っているではありません。あの場合、忠告が良いか悪いかは、結果によって判断するより仕方ないことなんですもの。」(Ch. 23, p. 248)と述べている。「忠告の良し悪しは結果次第」という結果主義は、Austenの作品には珍しい。これに従えば、Anneは婚約しながら結婚を待たずに死亡したFanny Hervileになったかもしれず、負傷した夫をもつJane Eyreになるかもしれず、夫が戦死したMrs. Batesになるかもしれない。結果主義は、人生において確かな未来や安心など得られるはずもない、という経験から導き出されたものだろう。この偶然に支配される人生を身に染みて理解しているのは、Anneの学校の友達だったMrs. Smithである。友人の裏切りによる夫の破産と死亡により、今は落ちぶれてバースの安宿で病身を囲っている。が、彼女はどんな苦境にも耐えて未来への道を切り開く“the elasticity of mind”（「心の柔軟性」Ch. 24, p. 167）の持ち主である。

Yet, in spite of all this, Anne had reason to believe that she had moments only of languor and depression, to hours of occupation and enjoyment. How could it be?— She watched—observed—reflected—and finally determined that this was not a case of fortitude or of resignation only.—A submissive spirit might be patient, a strong understanding would supply resolution, but here was something more; here was that elasticity of mind, that disposition to be comforted, that power of turning readily from evil to good, and of finding employment which carried her out of herself, which was from Nature alone.

(Ch. 17, p. 167)

Anneの「心の柔軟性」の賞賛を通して、作者がMiss Smithの人生を肯定するのであれば、やはりAustenは、より不確実で危険に満ちた19世紀の世界で生き延びる方法を模索し始めていたのだろうか。“moral”と“feeling”の葛藤の克服だけでは済まされない、新たな時代に入力したことをAustenは予感したのかもしれない。しかし、作品の結末では、俗悪なほどに心の柔軟性をもったMr. William ElliotとMrs. Clayが結婚して、Kellynch-hallを乗っ取り、一方そこを放棄したAnneが、将来戦争勃発で己の幸福を曇らす日がくるかもしれないことが仄めかされる。“Sentimental novels”の呪縛から解放された女性の人生の真実を探究する旅は始められたばかりで、作者の死亡により中断したのである。

本論は日本英文学会第71回大会（1999年5月30日、於松山大学）において口頭発表したものに加筆したものである。

Bibliography

Texts:

Austen, Jane. *Sense and Sensibility* (1811). Penguin Books, 1995.
Persuasion (1818). Penguin Books, 1980.

References:

- Astell, Ann. “Anne Elliot’s Education: The Learning of Romance in Jane Austen’s *Persuasion*”: *Persuasion*, ed. by Patricia Meyer Spacks. New York and London: W. W. Norton, 1994.
- Barker, Hannah. *Newspaper, Politics, and Public Opinion in Late Eighteenth-Century England*. Oxford: Clarendon Press, 1998.
- Butler, Marilyn. *Jane Austen and the War of Ideas*. Oxford: Clarendon Press, 1975.
- (Ed.) Copeland, Edward and McMaster, Juliet. *The Cambridge Companion to Jane Austen*. Cambridge U.P., 1997.
- Duckworth, Alistair. *The Improvement of the Estate*. Baltimore: Johns Hopkins U.P., 1971.
- Ellis, Markman. *The Politics of Sensibility*. Cambridge U.P., 1996.
- Garis, Robert. “Learning, Experience and Change” in *Critical Essays on Jane Austen*, ed. by B.C. Southam. London and Henley: Routledge and Kegan Paul, 1968.
- Hill, Draper. *Mr. Gillray the Caricaturist: a Biography*. London: Trustees of the British Museum, 1942.
- Hopkins, Robert. “Moral Luck and Judgement in Jane Austen’s *Persuasion*”: *Persuasion*, ed. by Patricia Meyer Spacks. New York and London: W. W. Norton and Company, 1994.
- Jonson, Claudia. *Equivocal being: politics, gender, and sentimentality in the 1790s: Wollstonecraft, Radcliffe, Burney, Austen*. Chicago and London: The University of Chicago Press, 1995.
- Jones, Cris. *Radical Sensibility: Literature and Ideas in the 1790s*. London and New York: Routledge, 1993.

田 中 淑 子

- Kirkham, Margaret. *Jane Austen, Feminism and Fiction*. London and Atlantic Highlands, NJ: The Athlone Press, 1997.
- Litz, Walton. A., *Jane Austen: A Study of Her Artistic Development*, Oxford U.P., 1965.
- Mayo, Robert. *The English Novels in the Magazines 1740–1815, With a Catalogue of 1375 Magazine Novels and Novelles*. London: Oxford U.P., 1962.
- (Ed.) McMaster, Juliet and Stovel, Bruce. *Jane Austen's Business: Her World and Her Profession*. Macmillan, 1996.
- Mudrick, Marvin. *Jane Austen: Irony as Defensive and Discovery*. Princeton, New Jersey: Princeton U.P., 1952.
- Mullan, John. *Sentiment and Sociability: The Language of Feeling in the 18th Century*. Oxford: Clarendon Press, 1988.
- Roberts, Warren, *Jane Austen and the French Revolution*, London and Atlantic Highlands NJ: Athlone, 1979.
- Tanner, Tony. *Jane Austen*. Macmillan Education, 1986.
- 都留信夫編著『イギリス近代小説の誕生—18世紀とジェイン・オースティン』, 京都: ミネルヴァ書房, 1995.